



第3 会場

■司 会／石田由美子(山口県) 子育て支援グループてるてるぼうず代表
津幡 光浩(熊本県) 熊本県教育庁社会教育課社会教育主事

1 今こそ学校支援を！

—中学校への教育支援コーディネーター配置の目的と方法—

原田 尚(島根県雲南市) 雲南市教育委員会地域教育コーディネーター

配置の背景には子どもの学力、生活規律の低下と家庭・地域の教育力の低下、学校教育と社会教育の連携の必要などの認識がある。そこで子どもの教育に関わるそれぞれの単位組織の協働を促進する仲介者として「教育支援コーディネーター」機能を想定した。目的は行政における学社の一体的運営、家庭・学校・地域の連携・融合、具体的には中学校を拠点とした幼少年の一貫教育の推進、教員の意識改革等を目指している。教職の現場へ行政職を配置した「機能連携」が教育の一貫性を保障し、子どもの生活リズムの向上につながるか、否かは実践の成否にかかっている。

2 若者集団「大介」による地域の少年活動創造の挑戦

—一緒に学びながら、子どもたちが目指してくれる大人に—

三ツ田達彦(鳥取県湯梨浜町) 若者集団「大介」代表

中学校の同級生10人が5年前に若者集団「大介」を結成。学校週5日制の開始に伴い、週末の子どもの活動支援事業を開始した。現有メンバーは中学生、高校生を含め、拡大して25人。活動は小学生のあこがれの目標となり、地域の大人も「おやじグループ」を立ち上げる等、活動の影響は拡大している。活動の継続は「大介」メンバーの「やりたいことをやる」ことを原則とすることで担保されている。

3 ふれあい通学合宿「夢の体験塾」

—7泊8日間9回の実施を支えたもの、見えてきたもの—

竹井 章(福岡県岡垣町) 「夢の体験塾」実行委員長

主催の中核は「青少年健全育成町民会議」である。平成9年より今年で11年を迎え、平成18年度も年9回実施している。合宿の行程は7泊8日、参加対象は町内5つの小学校からの公募で、混成集団である。合宿には高齢者施設「若潮荘」を増築して使用している。最大の問題である「送迎」は紆余曲折を経て公用車を使用する。運転はシルバー人材センターへの委託である。特徴は合宿の全期間を通して宿泊・指導を担当する「塾長」の存在であろうか。その他の指導者は交代制のボランティアである。

4 「おおせとオヤジ夜究教室」

—家事を極めて男を磨く自立プログラム—

竹嶋 巖(長崎県西海市大瀬戸町) おおせとオヤジ夜究教室 事務部長

平成12年のスタート。男の自立を目指して「家事を極めて男を磨く」ことをテーマに料理、裁縫、農作業、身だしなみ、介護、環境対策等を活動プログラムに選んだ。特に料理については、そば打ちから始め、みそ汁、イタリア・フランス料理、現在は小学生との交流事業を契機に石釜パン焼き・ピザ焼きまでに挑戦。活動は月2回、会費月額千円、会員数23名。今後は環境問題にも領域を拡大し、団塊世代の活動モデルを提示したい。